



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

注意 選択と統合

横澤一彦

認知心理学において、注意が認知機能の基本をなすと考えられるようになってから久しいのですが、ここ40年ほどの間に、様々な研究が爆発的な規模で行われてきました。その結果、われわれが環境に適応的に行動し、身の回りのものごとを認識するために、注意の働きが欠かせないことがさらに明確になる一方、蓄積された多様で膨大な研究成果の全体像が見えにくくなっているように感じていました。本書は、長年注意の研究に携わってきた2人の著者が、注意に関する心理学的研究の全体像

を俯瞰し、丹念に論じることを目指した、初めての学術書となると思います。巻末には1,000編に及ぶ引用文献が掲載されていますが、それらを含め、心理学や関連分野において注意に興味を持った方々が、これまでの注意研究の発展を知るための手がかりにしたいと思います。

なお、本書はシリーズ統合的認知の第1巻ですが、2016年2月には第2巻『オブジェクト認知：統合された表象と理解』が刊行されており、残り4巻を含め、全6巻が順次刊行される予定です。



共著 河原純一郎・横澤一彦
発行 勁草書房
A5版 / 356頁
定価 本体3,500円+税
発行年月 2015年11月

よこさわ かずひこ
東京大学大学院人文社会系研究科教授。工学博士。専門は認知心理学、認知科学。注意やオブジェクト認知などに関する論文多数。現在は、共感覚や感覚融合認知などを含めた統合的認知の研究に従事。著書はほかに『視覚科学』（勁草書房）など。

情報を生み出す触覚の知性 情報社会をいきるための感覚のリテラシー

渡邊淳司

神学者J. P. Carseの著作『Finite and Infinite Games』（1987）には、以下のような記述があります。“Finite players play within boundaries; infinite players play with boundaries.”世界には、目的が決まっていて、ルール（境界）の中で勝つことを目指す「有限ゲーム」と、目的は決まっておらず、そのゲームの存続自体を目指し日々ルールを更新していく「無限ゲーム」の2種類があり、私たち人間が生きていくことは無限ゲームであるということが述べられています。

現代の情報社会で無限ゲームを

続けるためには、記号化された情報が自分にどのような影響を与えているのかを理解し、これまでにない感覚や情報機器を通じて周りの人々と新しいコミュニケーションを作り出していくといった、社会のルール自体に気が付き、それを自ら改編する力が必要になると考えられます。本書では、そのようなルールの発見・更新には、触覚が重要な役割を果たしていると考え、その実践例（心臓の鼓動に触れて生命の意味を理解する「心臓ピクニック」等）を紹介し、理論的背景について述べています。



著 渡邊淳司
発行 化学同人
B6判 / 184頁
定価 本体1,500円+税
発行年月 2014年12月

わたなべ じゅんじ
NTTコミュニケーション科学基礎研究所主任研究員。東京工業大学特任准教授（兼任）。専門は知覚心理学。著書はほかに『言語と身体性（岩波講座コミュニケーションの認知科学1）』（共著、岩波書店）、『いきるためのメディア：知覚・環境・社会の改編に向けて』（編著、春秋社）、『触覚認識メカニズムと応用技術』（分担執筆、S&T出版）など。



編著 石川信一・佐藤正二
発行 ミネルヴァ書房
A5判 / 328頁
定価 本体2,800円+税
発行年月 2015年10月

いしかわ しんいち
同志社大学心理学部准教授。著書はほかに『子どもの不安と抑うつに対する認知行動療法』（金子書房）、『学校でできる認知行動療法』（共著、日本評論社）、『認知行動療法という革命』（共訳、日本評論社）、『不安に悩まないためのワークブック』（共訳、金剛出版）、『不登校の認知行動療法』（共訳、岩崎学術出版社）など。

臨床児童心理学 実証に基づく子ども支援のあり方

石川信一

本書は、『臨床児童心理学』の日本語テキストの草分けと位置づけている。臨床、心理、児童という言葉は頻繁に目にするかもしれないが、臨床児童心理学は、ありそうでなかった順列組み合わせかもしれない。しかし、何も言葉遊びをしたいわけではない。臨床児童心理学（Clinical Child Psychology）は、米国における起源を1930年代にまで遡る一般的な学問分野の名称である。それにも関わらず、今まで本格的なテキストが出版されてこなかったのは何故か。本書はその疑問から着想された。

本書は二部構成で、基礎と展開からなる。基礎では、アセスメント、研究法、介入法を紹介し、テキストの機能を果たすよう意識した。展開ではさまざまな臨床的問題の現状と課題を示し、専門家にも有益な情報を含むよう意図した。気鋭の科学者・実践家による各章は、これまでの集大成ではなく、これから進むべき方向性を照らし出している。このような試みを通じて、我が国の児童を対象とした心理臨床の課題を浮き彫りにするとともに、臨床児童心理学の未来の礎となることを目指している。



著 高史明
発行 勁草書房
四六判 / 240頁
定価 本体2,300円+税
発行年月 2015年9月

たか ふみあき
東京大学大学院情報学環特任講師、神奈川大学非常勤講師。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士（心理学）。専門は社会心理学（偏見・ステレオタイプ）。

レイシズムを解剖する 在日コリアンへの偏見とインターネット

高史明

近年、インターネット上を中心に在日韓国・朝鮮人への差別的な言説が盛んに流布されるようになり、深刻な社会問題となっている。本書は、そうした差別的言説の背景にある偏見の実態を心理学的に解明しようとした試みである。

欧米の心理学者たちが人種・民族偏見を積極的に扱ってきたのに比べると、日本の心理学者はこれまで、こうした「生臭い」—— 現実社会に直結した、政治的にデリケートな—— 問題を扱うことを極度に避けてきたように思われる。おそらくそれは、「生臭い」

問題を扱うことが科学的であることと対立するものであるかのように誤解されてきたことにもよっている。しかし本書を読めば、心理学者が使い慣れた手法で、心理学者が馴染みのある議論の進め方で、こうした問題を丁寧に「解剖」し社会に貢献することができると思える。心理学にできることは、日本の心理学徒の多くが思っているよりもずっと多い。本書を読んだ心理学者や学生の中から、研究をさらに発展させてくださる方が表れることを期待している。